

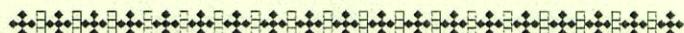
演題発表(口演・ポスター): 14:40-16:00

がんの子供を守る会シンポジウム「緩和ケアのガイドラインーこの子のためにできることー」 15:00-17:00

学術集会ホームページ <http://www.congre.co.jp/jspf-jspo2010/>

第8回日本小児がん看護学会

会長 藤原千恵子(大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻)



第7回小児がん看護研修会の報告

今年も8月28日(土)に、国立成育医療研究センターの講堂にて、第7回小児がん看護研修会を開催いたしました。教育委員の活動として、小児がん患者をケアするうえで直面する症状マネジメントについてシリーズ化することも計画して企画し、今年はシリーズ1回目として「嘔気・嘔吐」をテーマとして実践報告と講演が行われました。猛暑の中83名の参加があり、みなさん熱心に演者に耳を傾けていました。



実践報告では、東邦大学医療センター大森病院看護師、鷲尾もも子氏より、化学療法をうけ、繰り返し嘔気・嘔吐を体験する子ども

の予期性嘔吐に対して、子どものコーピングを大切にしながら、CLS (Child Life Specialist)との連携を行なながら支援を行ったことが話されました。

また、神奈川県立こども医療センター看護師、竹之内直子より、日ごろ看護師が感じている嘔気・嘔吐に関する日常生活援助における留意点や困難について報告がなされました。その後グリベック内服を行う思春期患者への関わりの事例を通して、子どもの考えを尊重することや治療効果を期待する周囲の思いとの間で感じた葛藤や、嘔気・嘔吐のコントロールがうまくいかなかったことからの今後の課題について話されました。

講演では、まず神奈川県立こども医療センター医師の田淵健先生より化学療法に伴う嘔気・嘔吐の機序や嘔気・嘔吐の支持療法について、わかりやすい図や研究データなどを示され説明いただきました。小児の場合、多剤を用い繰り返し化学療法を受けることから、急性や遅

延性の嘔気・嘔吐が重複しておこること、特に初回の化学療法時のコントロールがその後の予期性嘔吐に際して大事であることが話されました。

午後には、千葉県がんセンターの薬剤師である浅子恵利先生より化学療法に用いる薬剤の吐き気と制吐剤の薬理作用を使い方について、わかりやすく解説いただきました。嘔吐性リスク別の制吐療法について、最近用いられるアプレ

ピタントの具体的使用方法も含めて説明いただきました。先生からは、気軽に薬剤師に相談をしてほしいことがメッセージとして伝えられました。

最後に成田赤十字病院、がん化学療法看護認定看護師の宮田幸子先生より、嘔気・嘔吐のアセスメントと嘔気・嘔吐の生活への影響と援助について、実際に関わった具体的な事例をもとにお話していただきました。子どもだけでなく家族のサポートをしながら、子どもや家族とともに考える大切さを話されました。

今回の研修会に関するアンケートでは(回収51名)、研修会の内容について「臨床の実践につながる」や「薬剤の作用や選択する薬への理解が深まった」など教育的役割をはたしていたことや、薬剤師による講演を設けたことで、多職種チームアプローチの視点でケアを行うことの意義を再確認する機会となったことがわかりました。今後も症状マネジメントに関する研修会を企画し、子どもや家族のケア向上のために皆さんと一緒に考えていくならと感じています。(文責 教育委員会)

第42回国際小児がん学会に参加して

2010年10月21日から24日、ボストンにおいて開催された国際小児がん学会(42th International Paediatric Oncology Conference)に参加しました。紅葉が始まつた美しい街ボストンで、世界各国のナースたちからの看護実践の報告、小児がん看護の教育や研究の発表が多数行われました。

小児の看護に関わるナースに対する調査などの発表がありました。小児看護に携わる看護師のメンタルの問題を挙げているものもあり、多くの社会的支援も必要とされるとした内容でした。また、具体的にどのようなことに不満をもつ



42th SIOP の看護部門の会長(左)と、SIOP 看護部委員会、Patti Byron 氏(右)

てているのかという調査を行い、不満を減少させる積極的な方法を考えていくという内容が発表されていました。小児看護に携わる看護師が難しい環境に置かれ

ていることを考慮しながらの研究が行われているようでした。日本では、まだ小児に携わる看護師の問題に関する現状にとどまっていることが多いような気がしました。発表では、どのようにサポートしていくのかを示唆する内容でもありました。今後、日本でも小児看護に携わる看護師に対するサポートについて、より多くの研究が必要とされることを改めて感じました。また、化学療法などから起こる副作用に対するケアとして、嘔気・嘔吐の問題、口腔ケアの問題について発表されていました。このような問題に対して、しっかりと子どもと関わりながら解決していく研究がなされており、このような研究の必要性を感じました。また、日本の小児がん経験者の家族の方々によって、小児がん経験者のための「ハートリンク共済」についての発表がされていました。世界的にも珍しい活動ということでした。

Nurses keynote lectureでは、小児がんの子どものきょうだいに焦点を当てたお話をされました。日本でも家族看護として注目されている内容ではありますが、小児看護のなかの子どもと家族の看護としてとても興味深いものでした。

Poster Sessionsでは、数多くの研究が発表されました。日本からの参加も多く、活発な討議がされていました。ぜひ、今後も参加できればと思うとともに、より小児看護に関する研究と学習を重ねていきたいと感じる日々でした。

(東海大学健康科学部 和田久美子)

+++++

ワシントン国立小児病院での研修報告

2010年10月18日、19日の2日間、Children's National Medical Center(ワシントン国立小児病院)において、小児がん看護に関する研修に参加しました。



梶山理事長と Hinds 氏

修では、11名の看護師さんが、それぞれが行っている病院での役割や仕事の内容について話をして下さいました。

ワシントン小児病院は、323床、10の専門科をもつ国立の小児病院で、看護師数が1300人、そのうちNP(Nurse Practitioner)は92名ということでした。

今回、病院を訪れるにあたり、事前に小児感染症に関する抗体の有無について報告書を出したり、病院の作成するSafety Guidelineを読みテストに答える、などの準備が必要でした。当日も入り口でパスポートの提出、写真撮影を行い、名前と写真の入ったシールを胸に貼ってから入る、という手順が必要でした。病院に入るための手順は、外来患者さんも同様に行われており、診察券を見せてシールを作成してもらい、それを着用して病院の中に入っていました。今まで訪れたイギリスやオランダの病院と比べてセキュリティが徹底していると感じました。

1日目は、血液腫瘍を専門とするNP、脳腫瘍を専門とするNP、患者教育を担当する看護師などからお話を聞くと共に、それぞれの働いている病棟や外来を見せて頂きました。

2日目は、Case Managerとして働かれている看護師や、長期フォローアップ外来で小児がん経験者のケアをしているNPからも話を聞く機会がありました。現在日本でも、特定看護師やNurse Practitionerなどの必要性について検討されていることもあり、米国におけるNPの役割や教育課程に関する参加者の関心も高く、活発な質疑が行われました。また、長期フォローアップ外来の体制や経験者に配布しているパンフレットなどの情報も得る事ができました。さらに、日本の病院と比べると看護師の役割も細分化され、また医療に関わる専門職の種類も多いことを再認識した研修でした。詳細については、小児がん看護6で報告させて頂く予定です。

(淑徳大学 小川純子)



長期フォローアップのNP, Steacy 氏(前列中央)と Lendenmann 氏(後列一番左)と一緒に。前列左:石田先生(聖路加病院医師)